

第 11 号 事業開始から1年。ビシャカ・ワニタ・クランティ始動！

(平成 17 年 8 月 1 日発行)

～ SHG 連合体「VVK」のミーティング実況中継～

早いもので JICA 草の根技術協力事業スタートから 1 年。

PCUR - LINK 便りの第 1 号には、「JICA やらソムニードとやらが何かプロジェクトというプレゼントをくれるかも！」という期待いっぱい、事業開始式に集まった 800 名のオバチャンたち。

ところが、事業開始式にソムニードから「ソムニード(NGO)も政府もデウル(テルグ語で神)やサンタクロースではないのでプロジェクトというプレゼントを持って町にはやってこない。JICA のプロジェクトは町にやってくるが、プレゼントはもらえない。SHG のメンバーたちにとって同事業が本当に必要だと思ったとき、初めてプロジェクトがスタートする。」と言われ、何のことやらわからず、目を点にしていたオバチャンたち。さて、それから 1 年。

ここはビシャカパトナム市内と郊外のスラムの中間地点にある、プロジェクト事務所。

毎月の VVK 定期ミーティングも 3 月から今回で、6 回目を迎えた 7 月 28 日。

オバチャンたちには、発足したばかりの VVK (7 つの SHG の連合体の名前) の会則を作成するという大きな課題が... 7 つのグループから 3 名の代表が、毎月のミーティングに参加している。出席率は 100%、遅刻は少々、という VVK ミーティングであるが、今回はじめて、7 つのグループ以外に、2 つの SHG が「私のグループも PCUR - LINK 事業に加わりたい、VVK メンバーになりたい」と言って、VVK の許可を得て、オブザーバー参加した。

今回は、第 6 回 VVK ミーティングの様子を実況中継でお伝えする。

オバチャンたちは、ミーティング開始から 30 分後、今日のミーティングの議題を 4 つ、黒板に書き出した。ちなみに、3 月の最初のミーティングでは、なんと議題を決めるだけで、2 時間かかっていた。。。

さてオバチャンたちが決めた今日の議題は、次の 4 つ。

- 1) VVK の会則、
- 2) プロジェクト事務所使用あたりのガイドライン作成、
- 3) 年間の事業計画づくり、
- 4) 市場調査のためのハイドラバード視察参加者リスト提出

オバチャンたちは、前回のミーティングで、各グループから毎回同じメンバー 3 名が、VVK ミーテ

ィングに参加するよう決めた。しかし早速、その3名以外のメンバーがミーティングに参加しているグループが1つ。

オバチャン1:「あんたねえ、前回のミーティングで、必ず3名同じ人を毎月のVVKミーティングに出席させるって決めたのに、どうして初回のミーティングから違う人を送ってくるのよ。いい加減にしなさいよ。決めたことが最初から守れなくて、どうして次回から同じ3名が来るっていうアンタを信じられるのよ！」

オバチャン2:「そんなこと言ったって、VVKミーティングに毎月来るって言った3名の都合がつかなくて来られなかったのよ。」

オバチャン3:「グループで決めたことを守れない、自分の都合を優先させるような3名をVVKミーティング参加者を選ぶ、アンタたちは無責任だわ！アタシらVVKのミーティングを何だと思ってるのよ！」

オバチャン2:「そーんなこと言ったって、今日は参加できないって強く言われちゃ。。。しょうがないから私が来たのよ。」

しばらく紛糾が続く。

VVKミーティング参加者に決めたメンバーを今回のミーティングに送ってこなかったグループのオバチャンは、残りのグループのオバチャンから徹底的に攻撃されてしまう。埒があかない、と判断した今日の議長オバチャンが、ソムニード・スタッフに救いを求める。

議長:「なんとかしてー。議論が収拾つなかないわー。」

ラマ・ラジュー 1:「議論が収拾つかなくなる度に、すぐ、スタッフに助けを求めるな。アンタたちのミーティングだろーが。」

議長:「今回だけだから、なんとかしてー。1つのグループがどうしてもVVKで決めたルールの通り、3名の代表を送ってこないのよ。」

プロマネ:「じゃあ、ちょっと発言してもいい？」

議長:「もちろん、もちろん。このままじゃ次の議題へ行けないわ。」

プロマネ:「アンタたち、そもそもどうして3名いつも同じ人がミーティングに参加するって決めたのよ？」

オバチャン4:「えー、だっていつも同じ人の方が参加すれば、継続してミーティングの内容を理解できて、その方がグループメンバーへの伝達も楽だと思ったからよ。」

プロマネ:「ふーん、でも毎月毎月同じ3人だと困ることだってあるんじゃない？」

オバチャン5:「そうねえ、自分のグループ・ミーティングもあるし、PCUR - LINKの研修も視察もあるし、しかもVVKミーティング。月に何度も仕事休むのは大変だわ。その3人の負担って大きいわね。それに3人以外の他のメンバーがVVKミーティングに参加する機会がなくなるし。」

プロマネ:「じゃあ、なんか妥協案はないの？いつもいつも同じ3人じゃなくて？」

オバチャン6:「うーん、基本的には3人決まった人が毎月のVVKミーティングに継続して参加

するけど、1人くらいは、都合の悪い人がいたら、誰か他の人に代わってもらってもいいってことにする？」

オバちゃんたち一同、またしばらく議論してようやく結論に達する。

とりあえず、決まった3名がローテーションで毎月のVVKミーティングに来ることになったが、3名のうち2名は、前月のミーティングに出席していること、という条件で落ち着いた。

その後、ようやく議題1のVVK会則について議論されることになった。

しかし。。。会則なんて一体何を話したらいいの???というオバちゃんたち。また議論が中断し、ソムニード・スタッフのラマ・ラジューをじっと見る、議長オバちゃん。

議長：「えーっと、今度だけだから、もう一度助けてー。会則って一体何を決めたらいいの？」

ラマ・ラジュー：「またか。」

オバちゃん7：「もう、議長のアンタ、他の人に議長を代わりな。いつもスタッフに助けを求めてばかりでダメじゃない。」

議長：「じゃあ、オバちゃん7、あんたが議長やれ。アタシこんな難しい議題の議長出来ないわ。」

そして、議長交代。

ラマ・ラジュー：「難しい議題って、アンタたちが自分で決めたんでしょーが。まあそれはさておき、じゃあ発言していいか？」

オバちゃん一同：「どうぞ、どうぞ。会則って何？教えて」

ラマ・ラジュー：「まずは、今までのVVKミーティングの議事録をもう一度見よ。」

オバちゃんたち、毎月のVVKミーティングが終わるために脳みそが初期化されるようで、過去の議論のデータはすっかり消えている。このあたりは、黄門さまに叱られる度に、脳みそを初期化して、叱られたことをきれいに忘れてしまうプロマネとそっくり。慌てて議事録を見るオバちゃんたち。

オバちゃん8：「あー、4月にも5月にも、新しくVVKメンバーを選ぶにはどうしたら、いいか、VVK代表や事務局長、出納係はどんな仕事か、議論してるー。」

ラマ・ラジュー：「そうだろう、そうだろう。そういうのを集めたのが会則だ。ここに質問表があるから、これをみんなで考えてごらん。」

そこでラマ・ラジューは、会費はいくら？、総会はいつ？、代表の任期は？と、いろいろ質問の書いた紙を新議長に渡す。

実は、この質問表、すでに6月の時点でソムニードでは準備していたのだが、オバちゃんたちが「会則を作りたい、会則を決めたい」と本気になるまで、公開しなかった。 2

それからオバチャンたちは、午後 12 時を過ぎても、午後 1 時を過ぎても、1 時半になっても会費は 25 ルピー、総会は年に 2 回、という具合に、その質問表にある項目をひとつずつ激しく、厳しい議論を重ねて、VVK の会則を決めていった。オブザーバーのスタッフ一同は、口を挟むわけにもいかず、お腹がグーグーになっていたが、黙って、オバチャンたちが時計を見てくれるのを待った。

しかし、議論また議論で、合計 21 名(7つのSHGから各3名)のオバチャンたちは、全く時計を見てくれない。お腹がグーグーなるスタッフたちに気づいた議長(交代させられてしまった方)が、ようやく時計を見た。

もと議長:「あーっ。もう 1 時半を過ぎているわ。昼ごはんよ。みんなミーティングは昼ごはん後に続けるから、ご飯にしましょー。」

プロマネ:「ようやく、気づいてくれたのね。もうお腹ペコペコ。さすが、もと議長だわね。ちゃんと時計を見ていてくれて、ありがとう。」

もと議長:「ふん、だからアタシじゃなきゃ議長はダメなのよ。」

プロマネ:「4 時のお茶の時間もちゃんと見ててね。」

もと議長:「任せておきなさい。」

さて昼食後すぐ、また議論に戻るオバチャンたち。

前述にあるように、今回のVVKミーティング、第6回目にして初めて、7つのVVKメンバーグループ以外に、2つのSHGが、オブザーバー参加していた。この2つのSHGからの参加者は、みんなビシャカパトナム市内のグループだが、2月末に行われたPCUR - LINK事業パートナーSHG選抜にもれてしまった。今回のVVKミーティングの前に、ソムニード事務所にオブザーバー参加したい、と電話連絡してきた。

オバチャン:「ソムニードのスタッフは、2月末のSHG選抜が終わって以来、まるで綱を断ち切るようにして、私たちのグループに来なくなった。私たちのグループは、ソムニードに綱を切られて、大海に漂うボートのようだよ。どうして毎月のグループ・ミーティングに来てくれないの？」

ラマ・ラジュー:「そうじゃないだろ。あんたち、自分たちでボートを漕げるのに、スタッフに頼ってばかりで、スタッフが来なくちゃ、ろくにミーティングも開かなかったろう。自分でボートを漕げるグループだけが、PCUR - LINK事業のパートナーだって、去年の12月に言ったじゃないか。」

オバチャン:「そうだったけ？ そうだったわね。ところで、アタシたちVVKっていうのが7つのSHGの連合で設立された、と聞いたんだけど、VVKミーティングに行ってもいい？」

ラマ・ラジュー:「ワシらに言われても困るよ。だってそれはVVKのミーティングなんだから。オブザーバー参加したかったら、VVKに許可を取るんだ。スタッフに言われても知らないよ。」

そこで、このVVK選抜にもれたオバチャンたち、早速近所のVVKメンバーグループに問い合わせ、オブザーバー参加することになった。ところが、オブザーバー参加オバチャンの威勢がよくて、どんどん議論に割り込んでくる。そこで。。

プロマネ：「ちょっと、発言していい？」

議長：「いいですよ、何ですか？」

プロマネ：「アンタたちVVKは、今日始めてオブザーバー参加したグループを受入れているんだけど、彼女たちにちゃんとVVKの紹介したの？VVKミーティングの規則を説明したの？」

オバチャン9：「何にもしてない。」

オバチャン10：「あーごめん、ごめん。何にも説明してないわ。」(オブザーバー参加オバチャンに向かって)

議長：慌てて「えーっと、このVVKミーティングは、オブザーバーは挙手をして、発言していいかどうかVVKメンバーに許可を求めてからしか、発言できないルールなのよ。最初に言わなくてごめんなさい。」

オブザーバーのオバチャン：「あら、ごめんなさい。知らなくてアタシ。どんどん口を挟んでしまったわ。これから黙っているわ。本当にごめんなさいね。」

オバチャン11：「いんや、悪いのはアタシたちなの。全然、説明しなくて、悪かったわ。最初に言わなかったアタシたちVVKメンバーが悪いのよ。ごめんなさいね。」

プロマネ：「そう、アンタたちVVKメンバーが悪い。自分たちのVVKのことを、きちんとよその人に説明できるようにならないとね。今すぐは無理かもしれないけど、だんだん出来るようにしないと。それに、VVKのミーティングはアンタたちのミーティングなんだから、たとえJICAの代表が来ても、インドの首相が来ても、オブザーバーはオブザーバーなんだから、発言するときはVVKのアンタたちの許可を求める必要があるのよ！」

オバチャン一同：怒られて、一時、反省。しかし、気を取り直して、また議論開始。そして、やっぱり、4時のお茶の時間は忘れられた。

VVKに新しいメンバーを受け入れる基準をどうするか、どうやって新しいメンバーをトレーニングするか、など激しく議論がされた。昼食後も、ときどき、ソムニード・スタッフの顔をチラチラと見て、「また議論が止まっちゃった、助けてー」と言うオバチャンたち。しかし、その都度、「今日は、もういっぱいVVKミーティングで話しちゃったから、もう黙っている。」とか、「今日はワシの家のヒンドゥー教の決まりで、VVKミーティングではしゃべってはいけないプジャ(祈り)をしている最中だから。」とあれこれ、理由をつけてオブザーバーに徹したソムニード・スタッフ。

ミーティングが終わり、9月のハイドラバードへの市場調査のための視察参加者や10月のチェンナイへの視察参加者が発表され、8月の定例ミーティングの予定がVVKメンバー間で確認された。

最後に、オブザーバーのオバチャンに意見を求める議長。

議長：「今日のミーティングはごめんなさいね。最初にルールを説明しなくて。でも初めてVVKのミーティングに参加して、どうだった？感想を言ってくると嬉しいわ。」

オブザーバー・オバチャン：「アタシすごい驚いているの。だって、去年の10月にアタシのグル

ーブもチェンナイのアクシャ銀行というところでSHGの連合体がミーティングを開いてるの見たわ。アナタたちは、それから1年も経たないうちに、実際にVVKというSHGの連合体ミーティングをして、PCUR - LINK事業を進めているんなんて、すごいわ。ちょっと羨ましいわ。アタシのグループだって、アンタたちが会則を決めたら、必ずVVKメンバー資格を獲得して、VVKに入るわ。だから今に見てなさい！」

とまあ鼻息の荒いスピーチを最後に、第6回VVK定例ミーティングは終了。8月は、継続してVVK会則づくりや、プロジェクト事務所使用にあつたのガイドラインを設定する。会則づくりも、事務所使用のガイドラインも、VVKミーティングも、オバちゃんたちにとってはすべて研修である。

二言目には「アタシたちのVVK」と言うようになったオバちゃんたち。

プロジェクト終了まであと1年半。どうなるオバちゃんたち？！

1:ソムニードには、インド事務所代表のラマ・ラージュと、PCUR - LINK事業担当のラマ・ラージュと同じ名前のスタッフが2名いる。同便り中、特に断りの無い場合は、PCUR - LINK事業担当のラマ・ラージュとする。

2:VVKの会則案をソムニードが作って、オバちゃんたちに署名させるだけなら、会則づくりなんて1日で終わってしまう簡単なこと。しかし、会則とは何か、なぜ会則が必要か、オバちゃんたちが内容をきちんと理解しないままの会則なんて、絵に描いた餅に過ぎない。オバちゃんたちが「自分で会則を作ったんだ、アタシたちの会の決まりごとはアタシたちで守るんだ」と思わないとなーんの意味もない。8月は、オバちゃんたちが会則を理解するための教材をマヒラ・アクション・スタッフフが作る。会則づくりはまだ続く。
